

35歳のデューダメルがウィーン・フィルを振る！

作品解説

若宮 由美 (op.257)

若手ベネズエラ人の指揮者がウィーン・フィルをいかに料理するか。お馴染みのシュトラウス一家の作品に、当時オペレッタの作曲家として世間を騒がせた作曲家の音楽が演奏されます。ウィーン楽友協会合唱団による《ウィンザーの陽気な女房たち》の〈月の光〉は、オペラがクライマックスを迎える前の高揚を称えます。そして、バレエ付き演奏は、1曲がヘルメスヴィラでの録画、もう1曲は楽友協会からの生中継となります。

フランツ・レハール：《ウィーンの女たち》から〈ネヒレディル行進曲〉

Franz Lehár: *Nechledil-Marsch, aus der Operette Wiener Frauen*

レハール (1870~1948) はプラハで勉強を終え、当初は軍楽隊長などを仕事にしていました。1902年に32歳でウィーンに来て、2作のオペレッタ、《ウィーンの女たち》(11月21日)と《針金細工師》(12月20日)をアン・デア・ウィーン劇場で初演し、成功を遂げます。それまでウィーンでは、ミレッカーとヨハン・シュトラウス2世を失い、オペレッタ界は「金の時代」の終わりを告げていましたが、「銀の時代」の幕開けです。《ウィーンの女たち》は、美しいクレールがピアノ教師ヴィリバルトと恋に落ちますが、彼はアメリカに行くと死んだと聞きます。そこで、彼女は裕福なフィリップと結婚するも、ヴィリバルトは生きていたという話です。ネヒレディルは音楽教師の名で、この曲はオペレッタの最後を飾る第3幕終幕の合唱です。

エミーユ・ワルトトイフェル：〈スケーターズ・ワルツ〉 op.183

Émile Waldteufel: *Les Patineurs, Walzer, op.183*

ワルトトイフェル (1837~1915) は、「フランスのシュトラウス」と呼ばれる人物。この曲は正式には〈スケートをする人々〉といます。彼の多くの作品でも、日本においてもっとも有名な曲。1882年にパリの「ブローニュの森」にあったスケート場に着想を得て作られ、俳優のエルネスト・コケリン (1848~19094) に献呈されています。この曲は、無声映画の時代に劇場の伴奏として使われました。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ〈帝都はひとつ、ウィーンはひとつ〉 op.291

Johann Strauss (Sohn): *S' gibt nur a Kaiserstadt, s' gibt nur a Wien, Polka, op.291*

イエッティ・トレフツ (1818~78) と結婚して2年後の1864年に、ヨハン・シュトラウス2世 (1825~99) がパヴロフスクで作った「ウィーン風ポルカ」。タイトルは、アドルフ・ボイエレル (1786~1859) のジグシュピール《アリーネあるいは別の世界の一部であるウィーン》からの引用です (1822年にレオポルトシュタット劇場で初演)。主人公の男女はウィーン人で、リフレインで何度もタイトルを連呼します。この曲はパヴロフスクで「帝都ポルカ」という題名で初演された後、12月4日のウィーンのリッパウガルトンで正々堂々と現題で発表に至りました。この年はヨハンのデビュー20年にあたり、この曲とともに〈記念の詩〉 op.1が演奏され、シュトラウス兄弟は幸せの年でした。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・シュネル〈冬の楽しみ〉 op.121

Josef Strauss: *Winterlust, Polka schnell, op.121*

1862年の謝肉祭はディアナ・ザールの経営者ハッサが、2月27日には「スケート靴を履いた仮面舞踏会」、3月1日には「吹雪の仮面舞踏会」を企画して、ダンス・ホールにアイススケートを作り上げて大いに盛り上がりました。その舞踏会にはヨーゼフ・シュトラウス (1827~70) も作品を寄せていました。しかし、3月3日に同じ会場でシュトラウス兄弟による慈善舞踏会が開かれるまで、この曲は秘密でした。そして当日、「終わりのない謝肉祭のスペクタクル」のもとに50曲ものヨハンとヨーゼフによる作品とともに初演されました。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈メフィストの地獄の叫び〉 op.101

Johann Strauss (Sohn): *Mephistos Höllenrufe, Walzer, op.101*

1849年9月に死去した父ヨハン・シュトラウス1世 (1804~49) のスタイルを守るべきものとして、2世も必死の努力を続けていました。これは、51年10月12日にリッパウガルトンで行われた慈善演奏会で初演された曲で、若い音楽監督は3000人以上の来場者を納得させました。「炎の中の放浪」とセンセーショナルなスローガンを付けたフェスティバルで、ヨハン・シュトラウス2世は彼自身の方向を示しました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：シュネル・ポルカ〈別に怖くありませんわ〉 op.413

Johann Strauss (Sohn): *So ängstlich sind wir nicht!, Schnell-Polka, op.413*

オペレッタ《ヴェネツィアの一夜》による巧妙なシュネル・ポルカ。このオペレッタは 1883 年 10 月 3 日にベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム劇場で初演されましたが、この曲のタイトルは第 2 幕のアグリコラのクプレによるもので、トリオに出てきます。旋律はマカロニ料理人パパコーダの「なぜだか楽しい…」という部分。ではなぜパパコーダ・ポルカとならなかったかといえば、op.412 にパパコーダ・ポルカが使われているからです。84 年 1 月 20 日にフォルクスガルテンで吹奏楽版が演奏されています。

フランツ・フォン・スッペ：《スペードの女王》序曲

Franz von Suppé: Overture zu *Pique Dame*.

スッペ (1819~95) はベルギー系貴族の出身。オペレッタ《スペードの女王》は、1862 年秋に《トランプ占い師》(1 幕オペレッタ) を改訂し、2 幕にしたもの。いずれもスッペの作品で、もとはプーシキンの短い小説。1864 年 6 月にグラーツのタリア劇場、翌 65 年になってウィーンのカール劇場で上演されます。序曲はいまでも演奏されることが多い楽曲です。

カール・ミヒャエル・ツィーラー：ワルツ〈いらっしやい〉 op.518

Carl Michael Ziehrer: *Hereinspaziert!, Walzer aus der Operette Der Schätzmeister, op.518*

ツィーラー (1843~1922) は 1904 年 12 月 10 日にカール劇場でオペレッタ《質屋の鑑定人》(3 幕) を初演します。この曲はその中のワルツ・リート。酒屋の主人が一番奥の居心地のよい席へ招く歌。単独曲としては 12 月 11 日にアンナホーフ・カペッレ・ドレッシャーにより演奏されました。ツィーラーはエドゥアルト・シュトラウスの後任として最後の宮廷舞踏会監督 (1908~18) を務めました。

オットー・ニコライ：《ウィンザーの陽気な女房たち》から〈月の出〉

Otto Nicolai: *Mondaufgang aus der Oper Die lustigen Weiber von Windsor*

ドイツの作曲家ニコライ (1810-49) は、ヨハン・シュトラウス 1 世と同じ年に世を去りました。ウィーン・フィルの設立に尽力した人物としても知られています。《ウィンザーの陽気な女房たち》は、イタリア・オペラが世を席卷する時代に書かれたドイツ語台本による喜劇オペラで、シェークスピアに基づきザロモン・ヘルマン・ローゼンタール (1821~77) が台本を執筆しています。1849 年 3 月 9 日にベルリン王立歌劇場で作曲家自身の指揮により初演されました。ウィーンでは 52 年 2 月に上演されています。この曲は第 3 幕の合唱で、夜 12 時になったことを知らせます。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈ペピタ・ポルカ〉 op.138

Johann Strauss (Sohn): *Pepita-Polka, op.138*

スペインの踊り子ペピタ・ドリーヴァ (1834~68) が 1853 年夏にウィーンにやってきました。ヨハンも勢いに乗り、この曲を書き上げます。ところが、8 月 1 日の初演は弟ヨーゼフに任せて、休暇旅行に旅立ってしまいました。シュペール亭で開催された「ペピタ舞踏会」にはもちろんペピタ嬢もやってきましたが、あいにくとその日はそれほどの観客が集まりませんでした。ウィーンの人たちは、踊りもしない踊り子を見るほどの興味は持ち合わせていなかったらしいのです。しかし、曲中にはスペインの歌から着想がみられます。

ヨハン・シュトラウス 2 世：〈ロトゥンデ館のカドリーユ〉 op.360

Johann Strauss (Sohn): *Rotunde-Quadrille, op.360*

ロトゥンデ館は 1873 年のウィーン万博の中心会場。1867 年のパリ万国博覧会の成功を夢見て、この建物が建てられました。弟エドゥアルト・シュトラウス (1835~1916) は博覧会に大反対したものの、ヨハン・シュトラウス 2 世はドイツのユリウス・ランゲンバハ (1823~86) の楽団と契約し、1873 年 7 月 3 日に同楽団を指揮してこの曲を初演します。しかし、5 月 9 日に「暗黒の金曜日」と呼ばれる株式暴落、7 月のコレラ流行などがあり、万国博覧会は成功に遠く及びませんでした。献呈はウィーン万国博覧会の主催者ヴィルヘルム・シュヴァルツ-ゼンボルン男爵 (1816~1903) ですが、当時はすでに主催者ではありませんでした。ロトゥンデ館は 1937 年 9 月 17 日に大火に見舞われ消失します。カドリーユは 2 拍子系の小曲 6 曲を連ねた楽曲です。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ〈奇抜〉 op.205

Johann Strauss (Sohn): *Die Extravaganten, Walzer, op.205*

1858 年 1 月 26 日にゾフィーエンザールでウィーン大学法学部のための舞踏会が開かれました。この曲はその晩に初演されましたが、〈奇抜〉といわれたのはワルツ本体に向けられた言葉でした。1 月 28 日付の『フレ

ムデンプラット』紙は、今シーズンの最高作であると太鼓判を押しています。その夏のサンクトペテルブルク近郊のパヴロフスクでも大盛況を収め、帰国後の11月22日のフォルクスガルテンでも新作に混じってまだ演奏され続けました。

ヨハン・シュトラウス1世：〈インディアン・ポルカ〉 op.111

Johann Strauss (Vater): *Indianer-Galopp*, op.111

イギリスやフランスで成功を収めたインド人ダンサーが、1839年夏にウィーンに来ることがわかりました。ウィーンでも当然のように成功が期待され、アン・デア・ウィーン劇場への客演が準備されました。しかし、どうしたものかウィーンの人たちにとっては「インディアン」が来ると話はすり変わってしまいました。それでもヨハン・シュトラウス1世はうまく世の中を泳ぎ、「インディアン祭」の準備にこぎつけます。8月12日に39歳の音楽監督はシュペール亭で同曲を初演します。「インド人」でも「インディアン」でも、陽気な仮面舞踏会を踊るのには結局、同じであったのだといえましょう。

ヨーゼフ・シュトラウス：〈ナスヴァルトの女たち〉 op.267

Josef Strauss: *Die Nasswälderin*, Polka mazur, op.267

ナスヴァルトはウィーンの南約100キロにあり、2000メートル以上のラックス山脈の北に位置します。この時代には近寄りたいたところでした。ここの貧しい「木こり」のために、ウィーンの作家アウグスト・ジルバーシュタイン（1827～1900）が協会を作り、ナスヴァルトを助けてました。ヨーゼフは1869年2月27日にウィーン7区の「大きなマヒワ亭」（小さな会場）でこの曲を初演しています。ポルカ・マズルカのテンポで奏されるレントラー。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈さあ踊ろう！〉 op.436

Johann Strauss (Sohn): *Auf zum Tanze!*, Polka schnell, op.436

1888年3月3日に「シュトラウス家の舞踏会」が華々しく開かれました。100人ばかりの来訪者には、ホテルを営むエドゥアルト・ザッハーの晩餐が振舞われ、おみやげが配られました。その箱の中は、この日にために作られた16小節のポルカの楽譜と、題名となったルートヴィヒ・ガングホーファー（1855～1920）の詩でした。この楽譜を手にしたピアニストのアルフレート・グリュンフェルト（1852～1924）は真っ先にピアノに飛びついたそうです。この曲が一般的に知れのは、同年10月21日の楽友協会の日曜コンサートでした。後に、楽長アドルフ・ミュラー（1839～1901）によって《ウィーン気質》（1899）の第3幕に登場します。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ〈千一夜物語〉 op.346

Johann Strauss (Sohn): *Tausend und eine Nacht*, Walzer nach Motiven der Operette *Indigo und die 40 Räuber*, op.346

ヨハン・シュトラウスがオペレッタに身を転じた作品は、《ウィーンの陽気な女房たち》というタイトルでした。しかし、それが上手いかず、アン・デア・ウィーン劇場の監督マクシミリアン・シュタイナー（1839～80）は、その音楽を使ってオペレッタを仕立てるという約束をします。そうしてできあがった《インディゴと40人の盗賊》を、シュトラウスの指揮で71年2月10日に初演しました。無理にウィーン風音楽をオリエント風にします。ワルツとしては、エドゥアルトの指揮で3月12日の「日曜のシュトラウス音楽会」で上演されました。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル〈チクタク・ポルカ〉 op.365

Johann Strauss (Sohn): *Tik-Tak*, Polka schnell, op.365

オペレッタ《こうもり》のモチーフを使用したシュネル・ポルカ。《こうもり》の初演は1874年4月5日にアン・デア・ウィーン劇場で初演されました。この曲は同年9月6日にエドゥアルト・シュトラウスによって「ノイエ・ヴェルト」で初演されました。主要旋律はロザリンダとアイゼンシュタインの「時計の二重唱」によりますが、続く部分は第3幕（合唱の「許さない、アイゼンシュタイン」）と第2幕（合唱の「なんと時間は早く過ぎるのか」）、それにアデーレのクプレ〈田舎娘に扮するときは〉です。